

萩原朔太郎研究

— その生涯と作品を通して —

五 十 嵐 茂 子

序 論

「月に吠える」で大正の文壇にデビューし、その特異な詩風で詩壇を風靡した萩原朔太郎は、大正から昭和にかけての近代自由詩に大きな影響を与えた。孤独と絶望を自由詩の型の中に叫んだ一人の詩人の生涯を通して、近代詩の流れを、人生を、たどってみたいと思う。

朔太郎の詩を述べるに先だち、まず、彼が世に詩を出す迄の生いたちを述べよう。

萩原朔太郎は明治十九年十一月一日（二十一年という説もあるが誤り）に群馬県前橋市北曲輪町十九番地に、開業医をしていた父萩原密蔵と、母慶（旧姓八木）との長男として生れた。

前橋の師範附属小学校を卒業後、前橋中学校へ通い、明治三十七年に同校を卒業した。「小学校の頃は孤独でいつもいじめられていた。」と彼自身書いているが、そこには、彼の自己意識が多分に含まれているらしい。中学時代には級友と同窓雑誌を発行し、短歌、文章などでなく挿絵も書いた。又萩原美穂の名で「新詩社」に入り、「明星」七月号に短歌三首が載ったりした。「新詩社」は一年程でやめている。

広瀬川白く流れたり

時さればみな幻想は消えゆかん。

われの生涯を誇らんとして

ああかの幸福は遠くにすぎさの

ちいさき魚は眼にもとまらず。

これは彼の郷土望景詩の一つ「広瀬川」で、「純情小曲集」の中の一詩であるが、彼の詩には、この様な郷土を歌ったものが多い。朔太郎にとって郷土は苦しみのもととして表現されている事が多く、郷土の詩には漂泊者の悲哀をすら感じさせるものがある。

「波宜亭」「小出新道」「広瀬川」など、皆我が故郷上州前橋市にあり。我れ少年の日より常にその河辺を逍遙し、その街路を行き、その小旗亭の庭に遊べり……（略）

「純情小曲集」詩中小解

ひとりの友の群を離れて、クロバアの浅る校庭に寝転びながら、宵空を行く小鳥の影を眺めつつ、即ち情熱に悩むたり……と歌った中学校も、今では他に移転して廃校となり、残骸の様な姿を晒している。私の中学校に居た日は悲しかった。落第、出資、鉄道制覇、絶えぬなき教師の叱責、父母の喧嘩、そして灼きつく様な苦しい性態、妄想、血塗られた悩みの日課……

散文詩「物みなは歲月と共に亡び行く」

われの中学にありたる日は

甜めく情熱に惱みたり

いかりて書物をなげすて

ひとりの校庭の草に寝ころび居しが

なにももの哀傷ぞ

はるかに青きを飛び去り

天日直照して熱く短手に照りぬ。

郷土歌集詩集「中学の校庭」

これら様々に、彼自身郷土に於ける少年時代を想い出し、表現している作品に、幼き頃の朔太郎の姿をしのぶ事が出来よう。神経が細く、感受性の強い子供であり、憶病だったらしい。常に何かの恐れを抱いていた様で、既に後の朔太郎を感じさせる。彼の詩に在る恐迫観念や、けだもの匂いなどの異常性を、ここに見つけるのである。

中学卒業後、明治四十年に熊本第五高等学校に入学したが、翌四十年九月、岡山第六高等学校に転校した。

高等学校に居た時には……(略)……歌人石井直三郎氏などと同級で室を一緒にしたので、盛んに道徳論や法律論を聞かせ、毎日友人と議論ばかりしていた。友人達は僕の事を詭弁学者と渾名し、煩さく議論しかけるのを嫌がって敬遠した。「廊下と室房」

「詩の原理」や、詩の自序、アフォリズムなどに表われる自信や主張の堅固さが、病的な弱々しい少年時代に変って、この高校時代にその性格を発揮する。自我意識が強く、負けず嫌いだである。新らしがり屋で、マンドリンをひき、友達とマンドリンクラブを結成したりし

た。そのスタイリスト的傾向は、彼の詩の表現面にも表われている。四十三年三月、第六高校独法科三年の時、パラチフスで入院し、そのまま中途退学した。二十五歳であった。病院を離れたいという父親の意思に反し、その後、前橋に帰省したり、東京に下宿したりしていた。上野音楽学校の入学試験を受けようとした事も有り、楽曲の初歩を学んだのは、彼の詩のリズム感に大きな影響を与えている。幼少の頃からオルゴールを好んで育った朔太郎は、音楽的才能を先天的に持っていたと思われる。何の生活の目的もない彼には、やはり劣等意識が強かった様である。昭和三年に再版した「郷土歌集詩」の序に、

郷土！いま遠く郷土を望望すれば万感胸に迫ってくる。かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんでいた。単に私が無職であり、変人であるという理由をもって、あはれな詩人を嘲罵し、私の背後から唾をかけた。「あすこに白痴が歩いて行く」そういつて人々が舌を出した。少年の時からこの長い時日の間、私は環境の中に忍んでいた。

と書いているのも、その表われであり、彼が常に感じていたものであろう。常に被害者、逃亡者の立場に自分を置いている孤独な彼の姿が、この文全体に漂っている。

以上、彼自身の過去随想を主に、朔太郎の世に出る迄を綴ってみて、彼の性格をある程度探ってみた。彼の性格そのものが、彼の詩に在る。

本論

朔太郎の説に依ると、「詩人には進歩、成長がない、唯変化、変態があるにすぎない」。この彼の説に従い、朔太郎の詩の変化を分類すると、

第一期 愛憐詩時代

第二期 月に吹える時代

第三期 青猫時代

第四期 郷土風景詩時代

第五期 水島時代

第六期 宿命時代

となる。第四期迄は、朔太郎自身が昭和三年の詩集の序に分類しているものである。「月に吹える」「青猫」の時代が最も彼の特異性を発揮した時期であり、詩作活動のピークであった。この分類に従って、朔太郎の詩の変化をたどり、その虚無感、孤独感の発展を、「青猫」を中心に追求してみたい。

第一期 「愛憐詩篇」時代

中学時代は別として、彼が初めて詩を発表したといえるのは、大正二年五月で、当時詩界の中心となっていた北原白秋の同人雑誌、「失楽」に抒情詩六篇を出した時である。大正十四年八月に新潮社より出版された「純情小曲集」の前半に載せられた「愛憐詩篇」は、この大正二年から三年頃の、朔太郎の初期の作品である。「月に吹える」の

詩風への変遷が速かった為、この詩は置き去りにされ、発刊が後になってしまったのであろう。当時、牧水の主宰する「創作」にも発表をしていた。

この頃から「失楽」を通して室生犀星を知った。彼の中に自分に通じるものを見つけ、涙を流して愛誦したという。

あるさよほ遠きにありて思ふもの

そして悲しく歌ふもの

たしや

さらされて郷土の衣食なるもの

ゆるるころにふるまじや

ひとり都のゆふれに

あるさよほ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

犀星の「青き魚を釣る人」の中の詩である。朔太郎はこの詩を解説して次の様に書いた。

(前略) …至る所の街々に、見知らぬ人々の群集する波にもまれて、ひとり都の夕暮をさまよふ時、天淵孤独の悲愴の思ひは、遠い故郷人の切ない思慕を禁じ得ないである。しかもその故郷には、我をこゝみ、仰り、殴打ち、人々が嘲笑っている。よしや脱落して、乞食の如く飢死するをも、決して知る所ではない。故郷は唯夢の中のもの…(後略)

全く朔太郎の個人的な解釈であるが、却って当時の彼の気持を理解出来る。この様に共通の感じ方、共通の诗情を見出し、彼は金沢にいた

扉星に手紙を出した。その後二人は親友として長く交際を維持していた。が、二人の詩の方向は、次第に隔りを示し、各自の詩風をたどった。扉星の強烈な生一本の抒情の強さが朔太郎には欠けていたし、扉星には朔太郎の持つ異常な神経と情緒が無かった為である。しかし、扉星の自由な詩的着想、発声、制作手法など、朔太郎が受け取った暗示や深い内的な感動は大きいといえる。

大正四年に扉星の同人として、山村暮鳥、多田不二等らと「人魚詩社」を起し、詩誌「卓上噴水」を三号迄発行したりしたが、大正五年六月から、同じ扉星、暮鳥、不二等及び竹村俊郎、恩地孝四郎などと「感情」を二十四冊発行した。「感情」という名は時の流れへの反逆であったと大正十一年「月に吠える」の再版の序に彼は書いている。当時の自然主義の美学が、抒情詩的な一齋の感情を排斥し、翻譯詩の西洋模倣に依って日本的な感情が光輝を汚されていたのに叛逆して、自然主義の文壇で最も軽蔑されていた「感情」の語を詩社の標語としたのである。「詩の新興を絶叫する最初の狼火」の役割を果たそうとしたのである。

初期の朔太郎の詩風は「邪宗門」（明治四十二年）「思ひ出」（明治四十四年）「東京景物詩」（大正二年）などの北原白秋の初期詩集の影響を強く受けている。「愛憐詩篇」の彼の詩には、白秋の系統を引くものが見られるが、更に後の「月に吠える」に飛躍する契機の様なものが見出される。

うしろをばなごにたへん

うしろはあぢかゝる花

もももつてに喚く日はあれど

うすむらさきの 想い出ばかりはせんで。

この詩など白秋の詩情をそのまま継いだものといえよう。唯難い丈でなく、白秋の表面的に美麗な詩から発展して、更に内面的に、質的に深くした詩である。「夜汽車」「静物」「洋銀の皿」など、その新しいみずみずしい感覚は、既にその後の象徴的な手法を閃めかしている。

あははや心をもつぱらじ

われならぬ人をしたひし時は過ぎゆけり

さはきりながらこの日また心悲しく

わが涙せきあへぬはいかなる恋にかあらむ

つゆばかり人を選しと思念にはあらねども

かくありてしきものの上は涙こぼれしをいかにすべき

ああけに今こそわが身を思ふなれ

涙は人のためなぞ

我のみをいとはしと思念ばかりに喚くなり。

—涙—

この詩や「旅上」「利根川のほとり」「浜辺」などは、朔太郎が、「この頃の詩風はふしぎに典雅であって、何となくあやめ香水の匂ひがする……（略）……ある人の来歴に対するのすたるぢやといえるだろう」といつている様に、純な、清潔な美しさがあり、素直な郷愁を感じさせる。抒情的な詩である。

第二期 「月に吠える」時代

処女詩集「月に吠える」は大正六年二月、三十二歳の時に、感情詩社、白日社の共版により発行された。彼が大正四年から六年にかけて

作った詩を集めたものであった。その極めて鋭い異常な官能と病的な幻想とが交り合つて作り出した特徴のある詩境と、その口語詩のリズム感によつて（吉田精一氏の説）、当時の詩壇に大きな波紋を投げかけ、相当騒がれた。白秋を中心とした当時の詩界は、文語の韻律詩が全盛を極め、外面的な粉飾に流れがちな詩風の抒情詩の時代であった。又、自然主義文学運動が旺盛な時代でもあった。「月に吠える」が投げた波紋は当然の事であつたし、それは朝太郎自身自覚していた事であらう。

その序に「詩とは感情の神経を觸んだものである。生きて動らく心理学である。」とまず書いて、当時の自然主義に彼のいう「叛逆」を示している。

月に吠える大は、自分の形に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する大の心に、月は青い幽霊のやうな不古の謎である。大は速吠えを率ゐる。私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のおとを迫つて来ないやうに。

(序)

「月に吠える」は彼が又「詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。」といつてゐる様に、彼の孤独のなぐさめであつた。病める魂からの逃避であつた。「人は一人一人では、いつも永久に、永久に恐ろしい孤独である」と叫ぶ朝太郎が、しかし、その孤独な人々の心の中に在る共通性を見つけた時生れる人間の「道徳」と「愛」とに救いを求めて、紙にぶつつけた叫びであつた。朝太郎にとって、詩作は生命がけの仕事でも神聖なる精神の道でもなかつたのである。

かたき地面に竹が生え
地上にするく竹が生え

まっしぐらに竹が生え
震れる籐籠のりんと

青空の下に竹が生え

竹・竹が生え

—「竹」後半—

この病的な、痛々しい孤独と絶望と、生きる恐怖とが、異常な頹廢的な匂いの中に吐き出す様に歌われている。病人、くちやみ、鼠、蛇、髪、毛、屍体、蛙、情慾、春夜、白粉、笛、まびしい、つめた、青白い、するどい、あわれ、かなしい、ゆがんだ、くまった、……いたる所にこれらの語が並び、「ああ」という絶望のうめきと共に、読者を救いのない恐怖の世界にひきずり込むのである。

先天的に音楽を知っていた朝太郎は、主観的なリズムに依つて、その心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章ではいい表わし難い複雑した特殊の感情を表現した。リズムは以心伝心であり、そのリズムを無言で感知することの出来る人。(序)を求めて、彼は「月に吠える」を出した。そしてそのリズムを表現する方法としては口語で詩を書いたが、川路柳虹、相馬御風などの口語自由詩運動が彼によつてはじめて完成されたといえる。西条八十は「口語詩の真の先駆者、完成者」として朝太郎を掲げているが、確かにその詩論、感覚のどちらから見ても、新しい現代詩の確立を見る。

私の詩集「月に吠える」—それは感情詩社の記念事業である—は、正に今日の詩壇を予感した敏初の傑作であつたにちがいない。およそこの詩集以前にかうしたスタイルの口語詩は一つもなく、この詩集以前に今日の如き批判たる詩壇の気運は感じられ

なかつた。すべての新しき詩のスタイルは此所から発生されて来た。すべての時代的
な抒情詩のリズムは此所から生れて来た。即ちこの詩集によって、正に時代は一つの
エポックを作つたのである。けにそれは夜明けんとする時の最初の朝陽であつた。

一「月に吠える」再版の序

彼のこの自己礼賛を読む時、頹廢的な悲哀と倦怠、絶望の病的な詩
情には感じられない常識的な彼の姿を見つけた様な気がする。「自由
詩と象徴詩は彼によって一致された」といわれる様に、リズムを重視
した象徴主義自由詩は彼により主張され、彼の「月に吠える」によつ
て実現した。

第三期 「青猫」時代

「月に吠える」の出版後、前橋市で従兄の萩原恭次郎らと文芸座談
会を何度か開いたりしていた朔太郎は、大正十二年一月二十六日に、
新潮社より、第二詩集「青猫」を出版した。「青猫」は「月に吠え
る」と並ぶ彼の代表詩集であり、「月に吠える」より更に彼の本領を
發揮した詩集である。処女詩集程の反響が無かつたが、それは系統が
同じ類であるからであらう。しかし詩人として一歩前進した詩集であ
る。ここに青猫を追求し、そのリズム感、虚無感(思想)を分解して
みる。

(4) 青猫について

「青猫」は「月に吠える」以後十二年迄の詩を集めたもので、「幻
の寝台」「憂鬱なる桜」「さびしい青猫」「閑雅な食慾」「意志と無
明」「鈍めける靈魂」の六章と他一篇の詩より成つてゐる。前の二章
は雑誌「感情」に發表した頃の作品で、創作年代別に分類してあり、

他は、八、九年から十二年初めの頃迄の作品で、主として情想やスタ
イルにより分類されている。この前二章と後四章には相当の変化が見
られ、後の四章では、その頹廢的な陰鬱性が増々強く感じられる。

作者の解説に依ると、「青猫」の青は英語の Blue を意味している。
即ち「希望なき」「憂鬱なる」「疲労せる」の語意を含む言葉であ
る。故に「青猫」とは、もううげなる猫、という意味である。作者
は「青猫」の中に、都会の空に映る電線の青白いスパークを大きな
青猫のイメージに見て、都会への切ない郷愁を表象している」とも述
べている。

彼は最初、この詩集に「憂鬱なる」という題名をつける積りであつ
たが、出版の頃は余りにその語が一般化して、官能的できらびやかな
その語の觸感が、稀薄になつてしまつた為と、詩風が時を経ている間
に変化して来た為に、変更した。

昭和十一年に定本「青猫」が出版されているが、昭和九年に書いて
いる自序に、改定版を出した理由として、「『青猫』が私の過去に出
した詩集の中で、特になつかしく自信と愛着を持つことである。世評
の好悪はともかくあれ、著者の私としてはむしろ『月に吠える』より
も『青猫』の方を愛している。なぜなら、この詩集には私の魂の最も
奥深い哀愁が歌われているからだ。処女詩集『月に吠える』は、純粹
にイマジスティックのヴェイジョンに詩境し、これにある生理的の恐怖感
を本質とした詩集であつたが、この『青猫』はそれと異なり、ポエジ
イの本質が全く哀愁に出發している。『月に吠える』には何の涙も哀
傷もない。だが『青猫』を書いた著者は、始めから疲労した長椅子の
上に、絶望的の悲しい身体を投げ出ている。」と書いてゐる。

「月に吠える」と「青猫」とは、文学史上共通の位置に在るといえる。しかし朔太郎は人々の「進歩が無い」という批判に反発して、「青猫」を全く違った新しい境地としている。「青猫」には「月に吠える」より更に先に突き進んだ絶望感、虚無感が在り、そこから又、宿命的なあきらめへと発展している。そこには現実や理情との闘争に疲れ果てて、力なく涙している姿さえ感じられるのである。

朔太郎の詩境が最も円熟した時代は、「月に吠える」から「青猫」にかけてであろう。「青猫」の序に、「私の情緒は、激情といふ範疇に属しない。むしろそれはしずかなる靈魂ののすたるぢやであり、かの春の夜に聴く横笛のひびきである。」と書いている様に、はっきりと自分の詩境を述べている。朔太郎は詩人であると同時に優れたエッセイストであった。彼の自作の批評も秀れているといわれる。「青猫」には、彼が文学上に於ける自分の立場をよく見つけ、詩型、詩想などを自覚していた事が窺われる。彼の詩に対して持っている論を実証しようとしている意志、作為が、その疲れ果てた、なまめかしい詩の内側に感じられ、詩人としての彼と、エッセイストとしての彼との余りの違いに目を見張る事がある。彼は抒情詩を夜の生活、思想詩やエッセイを昼の生活であるとしている。現実社会の避け難い苦悩から逃れる為に夜の世界を遊行するのであって、白昼においては常に健全な理性を回復していたという。その言葉に彼の二面性の解答の様なものを得る。詩人がエッセイスト、文明批評家を兼ねるのは、避け難い運命であり、必然の悲劇的同僚なのである。「げにエッセイストとしての私、思想詩人としての私は、私自身にとって忌々しく悲しいものはない。私の実の楽しい時間は、夜のイメージの中で美を幻覚している

時間、抒情詩している時の時間に過ぎない。」（「絶望の逃走」序）彼のこの言葉の中に、詩人の持つ宿命を感じる。又宿命としてあきらめている朔太郎を感じる。

彼の言葉の使用にも、詩型、詩想などと同様、意識が在る。例えば、のすたるぢや、いめえじ、ぐるうふの様な平仮名の使用である。しかし、朔太郎がいかに鋭い語感を持っていたかが、それにより判るのである。

彼が詩に表現しようとするものが、春の夜に聴く横笛の情緒である事を、「青猫」の序文に朔太郎は声を大きくして述べている。横笛という一つの艶めかしい情緒は、感覺でも、激情でも、興奮でもなく、「ただ静かに靈魂の影を流れる雲の郷愁であり、遠い遠い実在への涙ぐましいあこがれである。」という。確かに「青猫」においては、「月に吠える」に在る鋭い感覺と違った、よどんだ倦怠と虚無の情緒が流れ、漂っている。「詩の原理」にも表われている様に朔太郎は情緒派の抒情詩人である。

「青猫」の中、「閑雅な食慾」は他の篇と異なり、比較的健康的な明かるさを持っている。「笛の音のする里へ行かうよ」なども、何かの希望が在る。しかし他の篇の、深い絶望感、虚無感に朔太郎の本質が在るのではなからうか。

どこに私らの幸福があるのだろうか

泥土の砂を揺れば樹るほど

悲しみははよよ深へ湧いてくはななが

春は晩暮のかげにゆらゆらと

遠く他にゆすられながら行ってしまった。

どこに私の恋人があるのだろう

ばうばうてた野原に立って口笛を吹いてみても

もう水邊に空想の娘らは来やしない。

なみだによれたためるとんのずぼんをはいて

私は日雇人のやちこ歩いてる。

ああもう希望もない名刺もない未来もない。

さうしてとりかへしのつかない悔恨ばかりが

野鼠のやちこ走って行った。

この「野鼠」の詩こそ、当時の朔太郎の姿を代表しているものである。彼の絶望の詩の代表的なものの一つであろう。

(4) 朔太郎のリズム観について

「私の詩を読む人は、ひとへに私の言葉のかけに、哀切のかぎりなきえれぢいを聴くであろう。その箇の音こそは（略）…私の所謂・音楽である。詩は何よりもまず音楽でなければならぬ」といふ、その象徴詩派の信条たる音楽である。」 「青猫」序

朔太郎の詩の特色にこの音楽としての詩がある。人間が詩を思う時、一種のメロディーが伴う。その感知された旋律を、詩の言葉それ自身のリズムに彫みつけようとするのが、象徴詩派の理想であり、詩人と音楽家の相違する処であると考へた。この朔太郎のリズム観について少し詳しく調べてみよう。

「詩は言葉である」という思想は、朔太郎の掲げる象徴主義以前においては、所謂定型詩の韻律がリズムであり、外面的な形式上から音楽といわれていた。が、朔太郎のリズムは、外面的リズムではなく、

内容としてのリズムである。「水盤の中で遊泳している金魚」や、「不規則に動揺する衣装のヒダに見る陰影」が持っているリズムを表現しようとしたのである。

彼は抒情詩の発展段階として、自由詩は近世紀が生んだ、世界で最も進歩した詩型であるとしたが、自由詩は一つの転換期の過程に有る過渡期の詩型であるという批判を受けた。反対派の意見は「散文である詩は有り得ない」というものであった。これに対し朔太郎は、反対派が外観形式によって詩と散文を区別している事を批難して、内容の表現的実質の上から自由詩と散文の違いを説明している。自由詩と散文とは、どちらも本質は美の心象であるが、その浪の高翔と低迷とによって全く異なる。詩は実感の上位に跳躍し、散文は実感の低位に沈滞する。換言すれば、詩とはリズム（内的音楽）を明白に感じさせるものであり、散文はそれを感じさせないものである。もしくは不鮮明なものである。故に散文の形をした詩—自由詩—は存在し得る。というのが朔太郎の論であった。今日、当然とされる自由詩にも、この様な當時の文壇への抵抗が必要とされたのである。「若し私の思想が理解されないならば、それは私の説明の罪からではない。そして恐らく読者の鈍感の罪からでもない。私を理解し得ない罪のすべては私自身のこの時代にある。反対に、若し私が理解され、喝采されたならば、名答はすべてこの時代に帰するであろう。—その故に、その何れにせよ、私はいつも寂しく不満である。」ア・フ・リズム「新しき感情」に述べているあきらめの孤独も、こんな抵抗の裏に生じたのではないか。定型詩が民衆的な粗野な原始的リズム—幼児から人間が持っているもの—

を基にしている為、民衆に受け易いのに対し、自由詩のリズムは拍節の部分的なものであるため、貴族者流の薄弱で元氣のない生活を思わせ、民衆に受け難い事を認めている。が、大人が子供よりも高度であるのと同様に、自由詩は原始的な歌よりも高度であるべきだと、自身自身にいい聞かせて、「心内の節奏」と「言葉の節奏」との一致、情懷における肉感の高調的表現、との自由詩の特質を掲げて、「詩のリズムは即ち Vision である」と論じたのである。

我々は外観の類から音楽に接近するのではなく直接「音楽そのもの」の纏滲するにめえちの世界へ、我々自身を飛び込ませようといふのである。かくの如き詩は、もはや「形の上での音楽」でなくて「感じの上での音楽」である。そこで奏される韻律は、形体ある拍節でなくして、形体のない拍節である。詩の読者は、このふしきなる言葉の楽器から流れて来る所の、一つの「耳に聴えない韻律」を聞き入るのである。

読者は我々の詩から「拍節的な美」を味わう事は出来ないが、「旋律的な美」を享受する事が出来る。「旋律的な美」、それは言葉の柔しい抑揚であり、且つそれ口が内容の呼動である所の、最も肉感的な、限りなく甜めかしい誘惑である。

この旋律的な美は、言葉の持つ音韻的效果を利用して複雑なリズムを作ると同時に、言葉の持つあらゆる属性——調子、拍節、色調、気分、觀念——を総合的に利用して、心的リズムを創作する事によって表われる。

あのこの葉は風に吹かれて
なむなむと囁く
お聴き——いかに——

道路の向ふで吹えてある
あれは犬の遠吠えだよ。

のをある とをある やわあ

「犬は病んでゐるの？お母さん。」

「いいえ子供」

犬は吠えてゐるのです。」

彼の代表作「遺伝」の中節である。これなど「心内の節奏」が最も容易に感じられるものではなからうか。のをあるとをあるやわあ、という犬の声は、その音自体に感情のリズムを内含し、そこから読者は動物の本能的な恐れやうめきの様なぶきみさを感じる。お聴き！しづかにして、この語の持つ感覚は、至底定律詩に求める事の出来ない生きたリズムである。「犬は病んでゐるの……」以後の節は最後節にも繰返されているが、「遺伝」の詩全体の大きなリズムであり、朔太郎のいう「衣装のヒタに見る陰影」に通じる。又、彼の詩に用いられている「ああ」という感嘆語、「恋人よ」とか「おかあさん」「お嬢さん」などの呼び掛けの位置は、大きな役割を果していると思われる。

又、ひとつの幻像がしたいにちがついてくるやまだ。「緑色の笛」

春夜のままぬい寝人の吐息のやまです。「寄生蟹のうた」

わたしは鴉のやうに羽ばたきながら「願のない花」

などの「……のやうに」の使用も、単なる譬喩ではなくて、自我の心理的投入の象徴法で、主観的気分と客観的情景との結合の効果を狙ったものであると自ら云っている。これも広い意味のリズムではな

憎しみも共通なものに対するそれに似た傾向がある。生存の虚無と虚無を朔太郎は「意志と表象としての世界」から受けとった。その一切の意志と希望とを否定してしまう哲学に抵抗しながらも彼はその思想にひかれたのではないか。定本「青猫」の表紙の裏に「宇宙は意志の現れであり、意志の本質は悩みである。」というショーペンハウエルの言葉を掲げているのも、彼が自分の夜の世界―抒情詩の世界―に共通の性質の思想を感じていたからであらう。

何故彼は「人生は過失なり」と叫ばなければならなかったのか。彼がショーペンハウエルにひかれた原因を家庭に求める事も出来る。大正七年に結婚した彼は、大正十一年迄に二女を得た。しかし、その結婚は失敗であり、後に（昭和四年）離婚している。その乱れた家庭生活は、長女葉子の想い出の記の中にも描写されている。「情慾は判断を暗くする。その性急な要求がない時に、静かに熟考して妻を選べ。然るに人は、生涯の最も悪い時期に結婚する」と「虚妄の正義」の冒頭に書いているのも、自分の反省であった。帽子を選ぶよりも簡単に、つい手近の所で最も当の無いプロバビリティを見込んだ彼は、恋人を持つ妻、病める娘のいる非倫理的な不自然な、暗くアブノーマルな生活をしなければならなかった。「死霊と一緒生活」するようなものだった。現実から逃避する道がなく、悔恨と悲しみに耐えなければならなかった彼は、更に深い孤独に陥り、虚無主義へと走ったのである。「月に吠える」と初期の「青猫」に在る遠い期待やふくらんだ幻想は、その後の作品で失われ、全く期待も未来もない。人生を否定する方向へ進んだのではないか。現実に対する不満、反抗が、彼を孤独と虚無に駆り立てたのである。

ああどこまでもどこまでもこの群衆の涙の中をまわって行きたい……一つのたひらつきの「方角」ばかりをきいてながれ行く……群衆の中を求めて歩くのおぼきな都会の夜にわむるものは、ただ一匹の青い猫のかけたかなしい人類の歴史を語る猫のかけた、われの求めてやまざる幸福の青い影だ……「青猫」

寂寥、孤独を歌ってはいても、「青猫」の初期「幻の寝台」の頃には、この様に未来を求めている。しかし、

ああこのひつこのまづしき心はなにもの生命をもとめ、なにもの影をみつめて泣いてゐるのか……「憂鬱なる花見」

と、ここには未来を見失った戸惑いが歌われ

けにそこにはなにどの希望もなし、生活はただ無意味な愛醇の連なりだ、梅雨だじめじめとした雨の点滴のやうなものだ……「憂鬱の川辺」

の様に発展して希望を失っていく。

恋人よ、母上よ、早くきてとどろきの光を消してよ……「窓」
その焦燥から逃避しようともがいて助けを求めた彼も、やがてはあきらめ、虚無の思想に落着いて行くのである。

影もかたも生活も悲寂をひしひしと漏れてしまった……「みじめな衝動」
どうして彼女はここに来たの、やさしい青き草のやうにかしき影よ、彼女は真でもない熊でもない、猫でもない、まじりにひびくはなる亡霊よ、彼女のさまよふかからだの影がまじりに漁村の磯波り、魚のくまぐました臭ひがする、その腹は日にとびとびとやうに生菓へ、かなしくせびなくほんたにたへがたい哀傷のほひである、ああこの春夜のやうになまめる、へにいろのあでやかな着物をきてまよふ人よ、妹のやうにやさしいひとよ、それは鴉の月でもない熊でもない、真剣でもなく、まじりてたなるといふ悲しきまらら、かうして私の生命や肉体はへきりて

ゆき「虚無」のおぼろげな景色のかけで 朧めかしくもなほはどきなだれて居るの
ですよ……「朧めかしくなげ」

この「貴女」「影」「亡霊」は虚無の影である。その虚無の墓場の様な世界に、力なくびしょびしょに濡れて寂しさを味わっている姿が在る。「影でもない」「様な」……でもない」の連続は、意味の上においても否定的な無意志の表情を示すものであるが、ひびき方でも日本語調における重苦しい自堕落で退屈そうな調子を伴って、虚無感を強調している。

もう愛憎の極も白く腐れてしまった……もう醒めない記憶もなら……「怠惰の窟」
ああ……「こゝもほちたなちもなち 恋もなち 落にぬれて亡霊のむな草を見てゐる……」
「寄生獣のうた」

こゝにもかもなへしてしまつた。なつたつ風の死んでる野道へきこもこゝの薬う
たからびてしまつた。なつたつなびて口分の来歴だう……「なびてい來歴」
この様な「ない」「なくしてしまつた」その語から丈でも、空虚の中へひきずり込まれる。

こゝにも新しい信仰はありはしなら……ほくの感情を燃え癒すやうな構想はあもあう
こゝにだつてあめはしな。……「愚い季節」

こゝにこんな荒涼の地方があるのだらう……こゝを風見の鶏が見てるのか
……「純猫と豚生」

こゝに私たちの幸福があるのだらう……こゝに私たちの恋人があるのだらう……「野風」
「こゝに十否定」「こゝに十疑問」の形式は不安定なもろさを持つて、強きの無いあきらめ、倦怠を絶望の中に織り込む。更にショーペンハウエルの「生きようとする意志が伶俐な動物において一番明晰に表われ、われらの本性が動物において単純化されて眼前に見える」と

いう説を受けて、象徴手段を動物に借り、その異常性、頹廢性を強める原因にもなっている。

△ぞろぞろと蛇の卵のやうに「ながつてくをさびしい囚人の群ではないか……」
「かなしい囚人」▽ △わたしは白っぽい病気の牡蠣 あはれなかなしい羽たきを守る生物です。……「白い牡蠣」▽ △みぢめなしよんぼりした 宿命の 因果の 呑まれた馬の影です。……「呑まれた馬」▽

「この詩集を書いた当時、私はショーペンハウエルに感服してゐたので、あの意志否定の哲学に本質してゐる、厭世的な無為のアンニユイ、小乗仏教的な寂滅為樂の厭世感が、自ら詩の情想の底に漂つてゐる」

定本「青猫」の自序に述べている様に、彼の詩の病的な異常な虚無感、彼の詩作法の意識、象徴主義により強められて打ち出されてゐる。

取り乱した姿で芸術に溺れる抒情詩人としての朔太郎の位置は、健康な人間性の肯定を主道とする大正以後の文芸の本筋から見ると異風なものである。近代社会の建設を急ぎつつ、近代の真の実現を見なかつた大正時代の焦燥と不満から生れた、懷疑的、虚無的な思想の一面が、特に鋭利に表白されたのが、朔太郎の絶望感、虚無感、倦怠感なのであらう。懷疑、虚無、世俗に対する憎悪、叛逆と絶望は後のダダイズムやアナキズムに影響を与えてゐる。

第四期 「郷土望景詩」時代

大正十四年八月に新潮社から発行された「純情小曲集」に、初期の作品集「愛憐詩篇」と共に納められた十篇の詩が、「郷土望景詩集」

である。「中学の校庭」「才川町」などと、故郷前橋市の地名を題名として、当時、東京郊外田端にいた彼が故郷を歌ったのであるが、それらは感傷的な郷愁の歌では無い。序論にも述べた様に、故郷への激しい怒りの叫びであった。心の寄所のない孤独な漂泊者の、社会への小さな反抗であった。

「青猫」出版後わずかに二年の間隔であるが、前作二篇に比べて、相当の変異がある。口語詩の提唱者である彼が、文語体で書いている。激する気持を表現するのに文語体の方が適したと彼は云ったが、朔太郎の後退であるともいわれた。詩風も前作とは異なり簡潔で、異様なねばっこさは無い。幻想的、感性的な夜の詩人の姿は無く、現実に立脚し、実生活、実人生を厳しく見つめた昼の詩人に変貌している。空想の世界に逃避する甘さでなく、その孤独感、絶望感は更に悲愴であるといえよう。

小出新道

ここに道路の新開せるは

直として市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど
さびしき四方の地並をきはめず

暗鬱なるかな

天日家並の呷に低くして

林の雑木まばらに伐られたり。

いかんぞ、いかんぞ思惟をかへさん

われの坂きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。

これは昔作者が愛した雑木林が、新しい道を作る為に伐り倒されてしまった事を歌ったものであろう。少年の日の想い出を雑木林の中にも抱いていた作者の老いた孤独な感傷と、少年の日の激情と悲哀を歌った望景詩である。実景を客観的に描写し、終末の三行に強く、想い出の林を新道に変えた人への怒りが叫ばれている。「樹木を無残に切り倒して作った道を私は叛いて行かない」という言葉に、現実への詩人の怒りの激しさと寂しさが在る。故郷の人々への怒りを秘めているのかもしれない。

この様な憤怒と憎悪と、それに伴う寂寥は、次の「氷島」で一層強く絶叫される。「郷土望景詩」は朔太郎の転換としての一時期を示すものとして重要な位置を持つものであると思われる。

第五期 「氷島」時代

第六期 「宿命」時代

大正十四年に東京に転居してから室生犀星丈でなく芥川竜之介、中野重治、堀辰雄らを知ったが、堀辰雄は相当彼の影響を受けている。

昭和二年頃から三好達治、梶井基次郎らと伊豆の温泉で知り合い交遊を結んだ。この頃から、彼は詩作丈でなく、詩論、アフォーリズムの面で活躍し、昭和三年二月「詩論と感想」という詩論集を出し、続いて十二月に数年前から考案していた「詩の原理」を第一書房から発刊した。それは十年間も彼が思索したもので、彼の詩の考え方をまとめたものである。詩という觀念が意味する根本の定義を知るために、詩的精神とは、詩の表現における根本の原理は、詩と他の文字との関係は、何であるかを追求した詩論であった。しかし現在も尚探求されて

いるこれらの疑問に、結論を下したとはいえず、詩の本質的な諸問題についての原理的な思考の方法を指導する働りきをした書である。

アフアリズム集は、昭和四年に「虚妄の正義」、十年に「絶望の逃走」を第一書房より出版し、十五年には創元社から「港にて」を刊行している。「すべての家庭人は、人生の半ばをあきらめてゐる」（虚妄の正義）の様に、皮肉っぽくなげやりな彼の人生観が並べられているが、芥川の社会観とある共通性を感じる。

「水島」は昭和九年六月に第一書房から出版された詩集で、作者もいっている様に「郷土望景詩」に通じるものである。昭和四年に妻と離婚し、一層家庭的にも絶望を味わつた彼の憎悪、反抗の表現は、更に強さを増すが、反面疲れ果てたあきらめ、寂寥も強い。敗北の詩集といえる。過去を振り返り、現在を凝視して、人生に敗れた事を悟り、号泣している様に思われる。もう現実から「脱るべき術もなく」

「過去は寂寥の谷に連なり、未来は絶望の岸に向へり。砂礫のごとき人生かな」と虚無に徹した感がある。教示ない詩であるが、昭和二年から八年頃にかけて作られ、詩作にも苦勞した様である。新境地を開拓しようと痛々しい程の探求をしたらしい。「青猫」の頃と比較すると、技巧的な進歩は見られ、努力の跡を見るが、それ丈に訴えるものは少なく若々しい柔軟性に乏しい。

ああ故 悲愴の人

悲しき落日の坂を登りて

憂なき断崖を深泊の行は

いふ家路はるかなんか

汝の家路は石の道なり

「漂泊者の歌」の末節である。孤独な人生に絶望し果てて、倒れようとする者の最後のあがきにも似ているが、そのたたくつける様な瞬間的な情熱は、いさか過度に陥っている。

「四季」の同人として三好達治、丸山薫、堀辰雄らと交わり、立原道造とも「コギト」を通じて知り合った。又十一年には「憂愁の詩人と謝蕪村」、随想集「廊下と室房」を出し、「詩人の使命」他の評論集も発刊している。文学界賞を受賞したりして、詩人としての地位は認められていたし、家庭も経済的には安定していた。昭和十三年四月に、詩人大友忠一郎の妹と再婚したが十四年には母との関係で離婚した。この様に孤独感は増々洩たされず、東京アマチュアマヂャンス倶楽部に入会して手品、魔術に熱中したのも、不満のはけ口を求めた為かもしれない。

昭和十五年一月に「宿命」を創元社から出版した。この詩集は前半が散文詩、後半が抒情詩になっている。「父は永遠に悲壯である」の様な現実的な父の悲壯性を歌つたものが多いが、この詩集は「水島」様のながきはなく既に孤独や絶望を宿命へと発展させた落着きがある。求め、叫んだ過去を静かに見つめて、敗れ去つた自分を洪笑し、全てを宿命としてあきらめられた姿は哀れであると同時に、美しい。

物みなは歳日と共に行は

ひとの来てもまよふな

流れも流き流川

何にせかれて止むべき

涙のみ水に残りて

わが情熱の日も流れ行は

あきらめの後に得た心の安らぎであり、幸福であろう。虚無感が頂点に辿りついた美しさかもしれない。

ああ神よ！もう取返す術もない。私は一切を失ひ尽した。けれどただ、ああ何といふ楽しさだろう。私はそれを信じたいのだ。私が生きて、そして「有る」ことを信じたいのだ。永久に一つの「無」が自分に有ることを信じたいのだ。神よ！それを信ぜしめよ。私の空洞な最後の日に。

今や、かくして私は、過去に何物をも喪失せず、現に何物をも失わなかった。私は喪失者のやうに空を見ながら、自分の幸福に満足して、今日も昨日も、ひとりで閑雅な麦酒を飲んでゐる。虚よ！虚よ！人生よ。

—虚無の歌—

敗れた者の美しさといえようか。昭和十七年五月十一日に肺炎の為朔太郎は死去した。五十七歳であった。孤独な彼の生涯は彼自身名付けた様に、漂泊者の生涯であった。

最後に常に朔太郎を慕った三好達治の詩で虚無の詩人萩原朔太郎観をまとめよう。

師よ 萩原朔太郎

幽寂の碑壇

惘疑と厭世との思想と彷徨との

あなたのあの懐しい人格は

なま温かい磐石のやちな

不思議な音楽そのままの不朽の凝結体—

あああの灰色の誰人の手にも捉へるすべのない影

ああけにあなたはその影のやうに飄々としていつもうつろふれた淋しい裏町の小路をゆかれる

あなたはいつもあなたのその人格の解きほこしのやちなまほし深い音楽に聴き耽りながら

ああその幻聴のやちな一つの音楽を心に拍子とりながら

あなたはまた時として孤独者の突拍子もない思ひつきと幽黙にみちみちれて

一醉つ払つて

灯ともし頃の懐かしい自伝車の行きすがら面をゆかれる

ああそのあなたの心理風景を想像してみる者もな、

都会の雑音の中にまぎれて（文学者）ものの中にまぎれて（）

あなたはまるで脱獄囚のやうに或ひはまた彼を追跡する密偵のやうに

恐怖し、緊報し、推理し、幻想し、錯覚し

飄々として影のやうに裏町をゆかれる

いはばあなたは一人の無類漢、宿なし

旅行娘ひの漂泊者

ソムリエ、ピエロ、夢遊病者

そしてあなたはこの現代に実に地上に存在した無二の詩人

かけがへのない二人目のない唯一最上の詩人でした

あなたはかりが人生をただそのままにまっ直ぐに捉せものなしに歌ひあげる

作文屋とももの掛け値のないそのままの傾度で歌ひあげる

不思議な音楽を、不思議な技術を、不思議な智慧をもつてあなた

あなたは詩語のコンパスでああなたの航海地図の上に

精密な貴重な生彩ある人生の最近似値を我々のアメリカ大陸を発見した

あなたこそまぎしく詩界のロマンツム

あなたの前で食はせ物の口の達者な木崎でもが

お弟子を集めて横行する(これが世間といふものだ

文人隠者系の市出性の知れた奴はな)

黒いリボンに飾られた先夜はあなたの写真の前で

しばらく涙が流れたが

思ふにあなたの人生は夜天をつたふ崖のやうに

単純に 平直に

高く 遙かに

燦爛として

われらの頭上を飛び過ぎた

師よ 誰があなたの孤独を嘆くか

○資料 一

萩原朔太郎全集 創元社

萩原朔太郎集 昭和文学全集22 角川

萩原朔太郎詩集 新潮社文庫本

青猫

純情小曲集 水島 散文詩 新潮社文庫本

詩の原理 新潮社文庫本

絶望の逃走

虚妄の正義

○資料 二

萩原朔太郎(藤原定) 角川新書

父・萩原朔太郎(萩原葉子) 筑摩書房

日本近代詩鑑賞(大正巻) (吉田精一) 新潮社

日本近代詩研究(山本捨三) 三和書房

自殺について (シローペンハウエル 石井立訳) 角川文庫

北原白秋詩集(神西清編) 新潮社

萩原朔太郎の作品と生涯(阪本勉郎)

ボオドレルと萩原朔太郎(木原孝一) 解釈と鑑賞 昭和二十七年九月号

解釈と鑑賞 昭和二十七年三月号

(完)

写真はおなじみの……

住吉 国道筋

三吉写真館

住吉 国道筋 阪神 国道住吉 西宮 西バス停前

TEL 神戸 ⑧ 7 7 3 0 番